人口問題研究（J. of Population Problems）56－3（2000. 9）pp. 56～69

研究ノート

フォーカス・グループ・ディスカッションの手法と課題：ケース・スタディを通じて

千年よしみ・阿部　彩

本稿は，質的調査法の一つであるフォーカス・グループ・ディスカッション（Focus Group Discussion, 以下ＦＧＤ）を紹介し，その特徴と利点・欠点をケース・スタディをもって検討するものである．ケース・スタディでは，若年時に海外滞在経験を持つ成人（いわゆる「帰国子女」）を対象に，海外経験がその後の進路選択にどのように影響したかを分析した．男女計40名，６回のＦＧＤを行った結果，ＦＧＤは当初予期されなかった新しい分析視点の導入に役立ち，その有効性が確認された．しかし，実施の際には，参加者の募集方法，グループの選定・構成，ガイドラインの設計など，事前に緻密な計画が必要であることも判明した．また，ＦＧＤは米国で開発された手法であるため，日本人を対象とする場合には，人数，参加者同士の関係などに配慮が必要なことがわかった．ＦＧＤは量的調査と組み合わせることにより，社会科学性の強い人口学分野において，特に役立つと思われる．

1.　はじめに

人口学においては大規模サンプル調査によるデータ収集・分析に代表される量的調査方法が主流である．このような調査方法から得られた分析結果は，サンプルが無作為抽出されていること及びサンプル数が大きいことにより，通常その母集団へ一般化が可能である．その反面，大規模な量的調査は研究対象者や現象の根底にある認識，価値観などの複雑な心理的要素や歴史的・社会的文脈を理解するには適していない．一方，質的調査は，調査対象者の感情やその推移，また問題の背景にある社会的文脈を捉えるには適しているものの，分析結果に主観が入るため客観性に欠けるという欠点を持つ．近年米国の人口学においては，量的調査と質的調査を的確に組み合わせることによって互いの欠点を補い，どちらかを単独に用いる場合に比べてより質の高い研究が可能となる，という見解が確立されつつある（Population and Development Review 1997, Vol.23, No.4; Bogue, 1993; Massey, 1993参照）．

本稿の目的は，人口学で最も頻繁に使われている質的調査方法の一つである，フォーカス・グループ・ディスカッション（Focus Group Discussion, 以下ＦＧＤと略）を紹介し，

その特徴と利点・欠点をケース・スタディを通して検討することである．現在ＦＧＤは広範な分野で使われており，特にマーケティングやプログラム評価の分野では，他の調査方法と組み合わせることなく，単独で用いられている場合が多い．その反面，人口学の分野では，ＦＧＤは量的調査と共に行われるケースが一般的である．以下，ＦＧＤの定義と特徴，手順，分析方法，そしてＦＧＤが調査を進める上でどのような役割を果たしたか，ケース・スタディを基に報告する．なお，ＦＧＤは米国でよく用いられている手法であるため，本稿で言及するＦＧＤについての見解は，米国の人口学の分野におけるものである．

2.　ＦＧＤの定義と特徴

社会学の調査方法においては，伝統的に量的調査方法か質的調査方法か，という二者択一的アプローチが一般的であり，なかでも社会人口学（social demography）の分野では量的調査方法が主流である．しかし量的調査方法が中心である人口学の分野においても，近年，質的調査方法の有用性が再認識されつつあり（Population and Development Review Vol.23, No4, 1997参照），量的調査方法と質的調査方法を統合させるアプローチが提唱されている（Bogue, 1993; Massey and Zenteno, 1999）．質的調査方法といっても，参与観察，個人面接，集団面接，ライフヒストリー分析など様々である．米国の人口学では質的調査方法というと，文化人類学の研究方法である参与観察と結びつけられる傾向が強かった（Knodel, 1997）．しかし，参与観察は時間・労力共に多大なコストがかかる上，それなりの訓練を受けた者でないとその利点を生かすことは難しい．その点，効率性やコストの低さ，また量的調査を補完する役割といった面でＦＧＤへの認識が高まりつつある．もともとプログラム評価が活発に実施された家族計画や保健衛生分野では，ＦＧＤは頻繁に用いられる調査方法であった（Calves, 1999; Zimmerman et al., 1990参照）．最近ではミシガン大学の John Knodel らが，タイにおける高齢化，世帯構造といったより社会科学性の強い人口学分野においてもＦＧＤを用いている（Knodel, 1993, 1998; Knodel et al., 1988, 1990）．しかし，日本の人口研究分野ではわずかに高齢者の世帯構造に関する事例（小島，1998; Kojima et al., 1999）と，フィリピン・タイとの共同研究による東南アジアの都市移動者に関する事例（Limanonda et al., 1999; Marquesz et al., 1999）が見られるのみである．

ＦＧＤは，第二次世界大戦後にラジオによる戦時士気高揚・キャンペーンの評価方法としてコロンビア大学のロバート・マートンによって開発された（Vaughn et al., 1996）．その後1950年代にその手軽さと効率性の良さからマーケティングや広告業界において，消費者の新商品に対する印象や反応を手早く得るために広く使われるようになった．1980年代から，社会学，心理学，教育学，人口学など幅広い学術分野でも，量的調査方法を補完する質的調査手法の一つとしてＦＧＤが用いられるようになり，その手法も目的に沿って多様化している．また，プロジェクトの評価・分析等の応用分野でもしばしば用いられている（Morgan, 1993）．

ＦＧＤとは，「あらかじめ選定された研究関心のテーマについて焦点が定まった議論をしてもらう目的のために，明確に定義された母集団から少人数の対象者を集めて行うディ

スカッション」(Knodel et al., 1990) である．参加者同士の自発的なディスカッションを促すために，前もって用意されたガイドラインに基づき，モデレーターと呼ばれる進行役がディスカッションをリードする．ＦＧＤの中の「フォーカス」という言葉自体，ディスカッションを行うトピックがはっきりと定められている事を意味する．ＦＧＤの目的は，参加者から定型的な回答を引き出すのではなく，設定されたテーマに対する参加者の感情，態度，価値観等を引き出すことである．ＦＧＤの特徴は，以下の５つの点にまとめられる (Vaughn et al., 1996)．

① 少人数（通常６～12人）の参加者を集めたインフォーマルなグループを形成し，選定されたトピックについて話し合いを行う．
② グループは，研究テーマに関連する属性・知識・特徴を持つ比較的均一な属性の個人を選定する．
③ モデレーターが，用意されたガイドラインに沿って質問し，討論の進行役を務め，また参加者同士のディスカッションを促す役を担う．
④ ＦＧＤの目的は，設定されたテーマに対する参加者の感情，態度，考えなどを引き出すことである．
⑤ ＦＧＤは母集団に一般化可能な量的な情報を得ることを目的としない．

ＦＧＤの特徴を浮き彫りにするため，集団面接との相違点を示したのが表１である．ＦＧＤは集団面接と類似しているが，ＦＧＤと集団面接との最も大きな違いは集団力学である（Knodel et al., 1990)．集団面接と異なり，ＦＧＤにおいてはモデレーターの質問に一人一人順番に答えるのではなく，参加者が主体となり自分たちの間で自発的にディスカッションを進める．ＦＧＤの最大の特徴・利点はこの集団力学である．集団力学から得られるＦＧＤの利点としては以下の４点が挙げられる．⑴ＦＧＤでは共通の特徴（属性）・経験を持つ人たちが意図的に集められているため，参加者同士の共感が高められ，より話しやすい雰囲気が作られる．参加者同士のやり取りや発言が刺激となって，他の参加者の発

表１　集団面接とフォーカス・グループの相違点

集団インタビュー	フォーカス・グループ・ディスカッション
質問紙	ガイドライン
定型回答	自由回答
事実	意見
面接者	モデレーター
わずかな集団力学	かなりの集団力学
補完的専門性をもつ参加者の選択	重要な属性について同質な参加者の選択

出典：*Knodel et al.* 1990

言を促し，１対１の面接では得られない幅広い考え方，態度，価値観，社会的文脈などの情報を得ることが可能となる．同時に一人の参加者が表明した考え，経験がどの程度他の参加者にも共有されているのか知る目安となる．⑵ＦＧＤでは互いの意見に刺激され，ディスカッションが進展し研究者には事前に予測不能であったテーマに話題が発展する可能性があり，新たな仮説の設定や知見を得るのに役立つ．⑶一人一人の意見はディスカッションの文脈内で表明されるため，研究者がその発言者の意図を間違って解釈するという危険性が少ない．⑷ＦＧＤは量的調査方法や集団面接よりも柔軟性が高い．例えば，ディスカッションが行われているその場でモデレーターがさらに深く掘り下げた質問をしたり，確認のための質問をすることも可能である．質問票を用いた調査では，回答者が設問の意味を取り違える危険性があるが，ＦＧＤではその場で質問の内容について説明し，誤解を避けることができる．更に，研究目的によってその設計を操作することも可能である．例えば，探索的な研究では参加者間の自由なディスカッションに重点を置き，その分析から仮説を設定するという帰納的なアプローチの仕方がある．その一方，既に仮説が設定されている場合，よりコントロールされた質問を行ってその検証を試みるという演繹的なアプローチも可能である．経済的・時間的なコストも参与観察と比べると小さい（Kruger, 1994; Vaughn et al., 1996）．

しかし，ＦＧＤのこのような利点は裏返せば，発言力の弱い参加者の意見や，多数と異なる意見があらわれにくいという欠点にもなる．また，集団力学が強く働く時は，参加者が個別面接の場合に比べてより強い意見を言う可能性もある．このような問題は，モデレーターの力量によってある程度回避することができると思われるが，もとより，ＦＧＤのグループはその参加者抽出方法やグループ分けの方法によって研究テーマと関連した属性を持つ特別に選ばれた個人の集まりである．そのため，ＦＧＤの結果は一般化できるものではないことを調査者は肝に銘じておかなければならない（American Statistical Association, 1998; Kruger, 1998）．

このように量的調査の特徴が母集団への一般化という「広さ」にあるとすれば，ＦＧＤの特徴は調査対象者・現象の根底にある複雑な感情や過程を明確にする「深さ」にあると言えるだろう．ＦＧＤの短所をも含めた特徴やその柔軟性を考慮すると，ＦＧＤは量的調査方法を補完するものとして位置づけるのが最も妥当であろう（Fuller et al., 1993; Knodel et al., 1990; O'Brien, 1993）．事実，ＦＧＤと他の調査方法（サンプル調査，個人面接，参与観察）とを組み合わせ，研究対象に多面的にアプローチする研究が増えている（Morgan 1997）．中でもＦＧＤを量的調査方法と組み合わせるケースが人口学では最も一般的である．

ＦＧＤを量的調査方法と組み合わせる方法としては，次の４つがある．⑴調査前に行う場合，⑵サンプル調査直後にその回答者を対象に行う場合，⑶統計的分析終了時点で行う場合，⑷調査と同時並行で行う場合である（Wolff et al., 1993）．最もよく使われるのは，調査前にＦＧＤを実施する方法である．この場合ＦＧＤの目的は，調査票の設計や調査票で使われる言葉の選び方，またより研究内容に関することとして仮説設定や概念を明確に

するためである．異文化環境において研究の中心テーマとなる概念やそれを測定するための道具（変数）が適切かどうかを判断するために使われたり（Fuller et al., 1993），探索的な研究や新しい領域の研究，社会的に微妙な研究を始める際に手軽に情報を得るという目的にも使われている（O'Brien, 1993）．属性の異なるグループごとにＦＧＤを行い，属性間の比較やグループに共通する特徴を発見することによって，変数間の因果関係についての示唆を得ることも可能である（Knodel et al., 1990）．どの段階でＦＧＤを行うにしろ，質的調査方法か量的調査方法の一つのみを用いるよりも，研究の質はより高まるものと期待される．

3.　ＦＧＤの分析方法

実際のＦＧＤの実施手順に関しては，詳しい説明や注意事項が多数の文献で述べられている（American Statistical Association, 1998; Kruger, 1994; Morgan, 1997; Vaughn et al., 1996）．しかし，肝心の分析について書かれた文献は少ない（Catterall and Maclaran, 1997; Knodel, 1993）．手順についてはケース・スタディで後述するのでここでは省略し，本節ではＦＧＤの分析方法について説明する．

一般に，ＦＧＤ分析の対象となるのは，ディスカッションの議事録（テキスト）である．各参加者の表情，手振りなども分析の対象となりうるが，熟練した調査者でなければこれら言葉以外による表現方法を的確に分析することは難しい．ディスカッションは，テープレコーダー，ビデオ，カメラ等に記録され，分析のためにはそれをテキストにおこす作業が必要である．分析の主軸は，議事録（紙に印刷されたものか，コンピューターの画面上で）から，キーとなる発言を洗い出して分類し，その発言内容を表す体系的なコードを付け（コーディング），そのパターンを検索し関係を探ることである．その具体的方法は，基本的には，テキストをコードごとにハサミで切り離し，大きな表に分類するという「切り貼り」方式とでも言えるものである．現在，欧米言語では，コンピューター上でこの処理を行うことが可能であり，専用のソフトウェアも開発されている[1)]．

コーディング方法は，様々な質的分析に使われているコンテント・アナリシス（内容分析）の影響を受けている．コンテント・アナリシスは，法則を導出，または評価する目的のために議事録等の文書内容を体系的に分析する方法のことである（Weber 1993）．コンテント・アナリシスでは，コーディングを行った単語や単語の組み合わせが文書内に何回出てくるか，という頻度に注目する．ＦＧＤの場合には，テープを聞いて発言に使われた言葉だけでなく，その発言の文脈，強度，トーンにも配慮するとより有効性が高まる．

コーディングの最初の段階は，ガイドラインに基づく質問に対してなされた発言にコード付けを行う作業である．通常，主要な質問群に対応するコードはテキスト中の発言の広範な部分を含む．次に，主要な質問に関連した更に細かい質問に対する発言にもそれぞれコードを付けていく．ガイドラインに含まれてはいないが，参加者間で自発的に出てきた発言で，研究者にとって興味深いと思われたものには別のコードを付けておく．

1）例えば代表的なソフトとして The Ethnograph がある（Knodel 1993）．

コーディングが終了した後は，グループ別ＦＧＤとコードから成る表を作成する作業を行う．各ＦＧＤグループとコードを軸にした表に対応するグループのディスカッション内容を記入していく．表のセルには，それぞれのＦＧＤグループがそのトピックに関して行った発言内容を簡単に記述する．内容は，そのトピックについてどの程度グループ内で同意があったか，研究者から見て情報の質はどうか，といったようなことである．このような表を作成することにより，ＦＧＤで話された内容の全体的な把握が容易になってくる．グループ間の比較を行う際にも非常に有効である．

コンテント・アナリシスのように，質的情報を量的情報に変換する処理方法については，全く批判的なものからある程度肯定的なものとに意見が分かれる．一般にマーケティング調査では，ＦＧＤ参加者の意見の解釈に重点を置き，コンピューターを使い出てくるキーワードの頻度を数えたりすることや，コーディングすることを好まない傾向にある．一方，社会科学者は，コンピューターを用いた分析やコーディングに対してより肯定的である（Catterall and Maclaran, 1997）．分析の初心者にとって，キーワードを数えたり，一つの意見について，どれだけの参加者が同意を示したか，または，その頻度など量的情報に頼ることは，非常に魅力的である．しかし Kruger（1994, 1998）は，同一意見の数や頻度は貴重な情報ではあるが，その意見の重要性と一致するものとすることに対しては「危険」であると警告している．ＦＧＤからの量的情報はあくまでもヒントと位置づけ議事録に戻って，更に詳しい分析を行う必要があると述べている．一方，Stewart & Shamdasani（1990）は，体系的な内容分析を行った後のＦＧＤのデータは，殆どの量的分析に耐えうるものであると主張している．

ＦＧＤを用いた分析に対する最も強い批判は，その分析方法が客観性に欠けるというものであろう（Stewart & Shamdasani, 1990）．確かに分析の段階ではグループ内のパターンや，支配的な考え方を探るにも研究者の主観が入ることは否めない．発言内容はその言葉通りに受け取るのではなく，発言がなされた文脈や状況を考慮して解釈されなければならない．量的分析と同様に，ＦＧＤのような質的分析においても，分析は科学的かつ体系的に行わなければならないのは言うまでもない．１人の分析者の主観によるバイアスを回避するために，分析は２人以上の分析者が別々に行い，整合性を確かめながら行うことが望ましい．また，参加者自身に発言内容を確認してもらうことも重要である[2)]．

ＦＧＤの分析の際には，発言に基づいた事実と分析者の考察を明確に分離するように注意する必要がある．ＦＧＤの第一の目的は参加者の意見を報告することであり，例え身振り等から想像される意見があるとしても[3)]，その意見が実際に発言されなかったのであれば分析対象となりえない（Kruger, 1998）．

2）参加者による発言内容の確認は，ＦＧＤ実施中に行うことも可能であるし，ＦＧＤ実施後に結果報告を確認してもらう方法もある．

3）もし，そのような場面に遭遇したならば，ＦＧＤのその場でモデレーターが参加者を促し，意見を発言するようにしむけるべきとしている．

4.　ケース・スタディ：帰国生を対象としたＦＧＤ

1.　ＦＧＤの手順と分析

本節では，筆者らが「帰国生の長期的適応ストラテジーに関する調査」研究の一環として行ったＦＧＤをケース・スタディとして紹介する．この研究は，現在社会人となった海外滞在経験者（いわゆる「帰国生」）を対象に，異文化体験のその後の人生選択に与える影響について探ることを目的とする．今後行う予定である本調査では，質問票を配布し統計的な分析を行う予定であり，ＦＧＤはその本調査の準備段階という位置づけで行われた．このＦＧＤの目的は仮説の検証というよりも，むしろ社会人となった帰国生にどのような形で海外体験の影響が見られるのかを探ることである．異文化体験の長期的影響は分析者にとって新しい研究領域であるため，ＦＧＤはより柔軟な構造を取ることとし，基本的なガイドラインは作成しつつも，より自由に話し合ってもらうよう心がけた．

ＦＧＤ参加者の絞り込みは，必要とされる情報を得る上できわめて重要である．この研究では研究の目的上，現在社会人となった帰国生を対象とした．「帰国生」とは，子供時代に海外に赴任する親に帯同され海外での生活を体験し，帰国後，日本の小・中・高・大学に入学または編入した者と定義した．ＦＧＤでは，ディスカッションのテーマをより絞り込むために参加者をさらに細かい属性に従って分類することがしばしば行われる．このＦＧＤでは，性別と職業により分類を行った．これは，最初のＦＧＤにおいて，性別・現在の職業によって，キャリア選択に違いが見られたためである．このため２回目以降に行われたＦＧＤでは，社会人（男性），社会人（女性），主婦（女性），大学生（男性），大学生（女性）の５グループに分けた．しかし，この分類の仕方は後の問題点でも述べるが，あまり意味のあるものではなかった．今回のＦＧＤのグループ分けは表２のとおりである．ＦＧＤでは，通常１グループ６名から８名が最適人数とされている．最初のＦＧＤは試験的性格のものであったため，11名という比較的大きな男女混合の社会人グループであった．

表２　ＦＧＤのグループ

	グループ属性	人数
1	社会人（男女混合）	11
2	社会人（男性）	4
3	社会人（女性）	8
4	主婦（女性）	7
5	大学生（男性）	6
6	大学生（女性）	4

今回のＦＧＤを行う上で最も困難だったことの一つは参加者の募集である．このＦＧＤでは，三つの方法で参加者を募集した．一つ目は個人的な知り合いや，知人のつてを通しての募集である．最初のフォーカス・グループではもっぱらこのルートに頼った．しかしこの方法で集められる人数には限界があるため，それ以降のフォーカス・グループではインターネット（帰国生情報を掲載しているホームページと当研究所のホームページ），および地域広報紙に帰国生参加者募集の案内を掲載した．実際の参加者の内訳は，知人のつてと地域広報紙からの応募者が18名ずつ，インターネット経由の応募者が４名であった．募集方法の媒体としては，地域広報紙の力が強く，つて以外のルートで応募してきた者のほとんどは地域広報紙を見てきた者であった．後に課題のところで触れるが，募集方法によっても応募者の傾向に違いが見られるようである．

ＦＧＤの方法に関する文献では，ＦＧＤ参加者は知らない者同士が良いとされている(Morgan, 1997; Vaughn et al., 1996)．デリケートなトピックや自分の価値観について語る際，他人同士の方が自由に意見を述べやすいのではないか，という配慮からである．しかし，この研究のＦＧＤでは参加者を集めるのに知人やモデレーターのつてに頼ったため，モデレーターと参加者が知り合い，または参加者同士が知り合いというケースもあった．また，互いに独立して応募してきたにもかかわらず，ＦＧＤの会場に来てみて，実は同級生であったというケースもあった．しかし幾つかの研究にもあるように（例えばCallaghan, 1998; Fuller et al., 1993)，研究対象者を集めにくい等の理由からこの原則が破られることも多い．逆に知人を含めることで集団力学が促進される場合もある．今回のＦＧＤでも参加者に知人同士がいると，その知人同士の間では自発的な話し合いが促進される傾向が見られた．

ＦＧＤは各２時間ずつ行われた．ＦＧＤは専門の録音業者によりテープに録音され，後にテキストに起こされた．モデレーターの他，１名が発言者の名前と発言の順番，簡単な発言要旨を記録した．起こされた原稿は，記録者がその整合性をチェックし修正を終えた後，分析の対象とした．

分析段階の最初の作業は，ノートに起こされたＦＧＤテキストを繰り返し読み，モデレーターの質問に対する回答及びディスカッションにコードをふることから始まった．このＦＧＤでは現地での異文化接触・適応状況，帰国後の自文化復帰過程，アイデンティティの三つの大枠に沿った質問を行ったので，まず，現地での経験と帰国後の経験に分類した．その上で，現地での異文化体験についてはさらに細かく，異文化接触段階での葛藤，その後の現地社会に対する見方の変化といった適応段階を示すコード，またその心理的変化や現地社会との接触の深度を規定していると思われる要因に関してコードを作成し書き込む作業を行った．帰国後の自文化復帰過程に関しても同様に，適応状況，心理的変化，それを規定する条件にコーディングを行った．一通りガイドラインに基づいたコーディングを終えた後，今度はガイドラインには関係ないトピックで幾つかのＦＧＤに共通して出てきた発言を洗い出し，コーディングを行った．コーディング作業は分析者２名が各自行い，その後，互いのコード付けを確認した．

このＦＧＤでは，グループを性別と職業で分類したものの，海外体験の内容は学校形態別（現地校・インターナショナル・スクール，日本人学校）の違いの方が大きいことがＦＧＤを行った事で判明した．従って分析でグループごとの比較を行うことを取りやめ，まず個人を単位として取り出し，個人の属性に注目しながら，コードを付けられた発言をその傾向によって分類した．

2.　ＦＧＤの役割

ＦＧＤを行ったことにより，研究を進める上でどのような利点があったのだろうか．得られた主なメリットとしては，⑴新たな分析視点の導入，⑵重点を置いていなかった属性による違いに対する認識，⑶新しい規定要因の発見，⑷仮説の初期的分析，が挙げられる．

今回のＦＧＤにおける最も大きな収穫は，新たな分析視点の導入である．当初海外滞在

体験がその後の人生選択に与える影響は，海外体験の内容―例えば滞在年数，滞在国―によるものが大きいと考えていた．しかしＦＧＤを行うにつれ，海外滞在後の人生選択に与える影響は，海外体験の内容も勿論重要であるが，それと同等あるいはそれ以上に帰国後の適応の仕方に影響されるのではないか，という知見を得た．人生の岐路においてどの道を選択するかは，自分の内面でどのように自分の海外体験をとらえているかに関わっている．そして，各個人による海外体験の捉え方は社会から受ける評価から大きな影響を受ける傾向が強い．社会の作る帰国生像（佐藤（1997）の言うところの「虚像としての帰国生像」）とそのズレから生じる葛藤は，帰国後時間を経た後でも表出し，その葛藤への対処の仕方がその後の人生に影響を及ぼすように見受けられる．

先行研究（小林，1988；中西，1988）においては，海外体験は時間的経過を経た後，どの程度残存しているのか，という視点から海外体験の長期的影響を分析している．この視点からは，帰国後の適応過程は抜け落ちている．しかし海外体験が人生の選択肢に与える影響は，日本帰国後にも社会と海外滞在経験者個人との相互作用によって作られていくものではないだろうか．本ＦＧＤの結果は，「帰国生」というカテゴリーへの同化プレッシャーが帰国後には必ず存在し，それに対する対処の仕方によって帰国後の人生選択が大きな影響を受けるということを示唆している．以上のような理由から，異文化体験の長期的影響がどのような形で残っているか，という従来の研究に使われた分析視点だけではなく，むしろ帰国後の自文化復帰過程とその適応ストラテジーがその後の人生選択にどのような影響を与えたか，という視点を新たに導入する契機となった．

二つ目に，当初重点を置いていなかった属性による違いを認識したことである．上記でも触れたが，ＦＧＤでは現在の職業・性別によってグループを分類していた．これは海外体験の影響がキャリア選択に与える影響に着目していたためである．しかしＦＧＤを行うにつれ，参加者の異文化体験・自文化復帰体験が海外での就学学校形態の違いによって大きく異なることが実感させられた．帰国生の多様性を目の当たりし，帰国生内の比較（就学学校形態別）を行う必要があるという分析方向性が導かれた．

三つ目に新しい規定要因の発見がある．例えば日本人学校就学者の異文化接触を規定する要因として佐藤（1997）は，家族的要因の中でも特に母親の社会的ネットワークを挙げている．しかし，今回行ったＦＧＤでは，日本人学校校就学者が現地社会に接するきっかけとなった要因として，父親の存在や異文化に対する方針を挙げた者が何名か見られた．海外滞在時には学校形態にかかわらず，父親の存在が日本にいた時に比べてより強くなる傾向があるように見受けられる．

3.　課題

このようにＦＧＤは，研究を進める上で，特に新たな分析視点の導入という点に関して大きな役割を果たした．しかし，今後ＦＧＤを行う上で改善すべき点も見受けられる．

⑴　サンプリング

ＦＧＤにかかわらず質的調査方法でしばしば指摘されることだが，このような趣旨のディスカッションに自ら応募してくる者は，そもそも一般的な若年時海外滞在者とは様々な面

で異なるグループと推察される．このことは，応募方法による参加者の違いからも見て取れる．本ケースの参加者は，公募と調査者の知人から構成されている．参加者の応募方法の違いがＦＧＤ討論の内容，集団間の力学，そして分析結果に影響を与えたと思われる．例えば，公募に自ら応募してきた者の多くは，自己の海外体験を高く評価し，トピックに関して強い関心と意見を持っていた．また，日本人としてのアイデンティティについて深く考えたことのある者が多かった．たとえ帰国生であっても，帰国後つらい目にあって自分の海外経験を評価していない者，海外経験を隠したい者等は積極的にはこのような場に応募してこないであろう．また，日本帰国後，うまく日本社会に適応できなかった者は海外で生活している可能性も高い．

また，ＦＧＤセッションを平日の夜早めの時間帯に設定したためか，現在仕事をしている者，特に男性会社員の応募は少なかった．前述したように，ＦＧＤは，無作為抽出によって参加者を抽出するのでなく，均一な属性の参加者，トピックに関して強い意見を持つグループを意図的に抽出し，より多くの情報を得ようとするものである．本ケースでは，まさにそのような参加者が多い結果となったが，本来の調査目的を考慮すると，海外体験がその後のアイデンティティ，キャリア形成，国際意識に大きな影響を与えていないと考えている参加者のグループを別に作ることも意義があったように思える．しかし，母集団自体がアクセスするのが困難な集団であるため，公募という手段は避けられず，その実現は不可能であった．

⑵　グループの選定

グループ分けの基準の決定は，慎重に行わなければならない．本ケースの場合，海外滞在によるキャリア選択への影響を検証することが目的の一つであったため，上記のように現在の職業と性別による分け方をしたが，実際にＦＧＤを行ってみるとこの分類はあまり意味を持たないことが分かった．現在の職業や性別よりも，海外体験（現地校／日本人学校，帰国年齢，滞在期間等），帰国後体験（帰国生受入校／一般校）といった属性の影響のほうが大きいことが判明したからである．そのため，一つのグループ内に共通の意見が表出せず，グループ間の分析は不可能であった．より同質性を高めていたならば，グループ内の発言ももう少し活発になっていたかもしれない．ＦＧＤのトピックによっては，参加者を選定，グループ分けする前に，プリテストを行い，どのような属性・経験の持ち主を募り，どのようなグループを作るか，あらかじめ検討する必要があると感じた．

⑶　グループの構成

研究対象の性格上，参加者を集めるには困難が伴った．⑴でも触れたが，元若年時海外体験者の会社員の応募者が少なかったため，知人のつてに頼った．そのため一つのグループでは知人のつてで集まった知り合い同士と，公募による参加者の混合になってしまったため，公募による参加者は，発言するのに少々気後れしたかもしれない．また，ディスカッションの最後の方になると，モデレーターが質問している間に私語が多くなってしまう原因ともなった．しかし，知り合い同士の間ではディスカッションが活発に行われ，今回のＦＧＤの中では一番参加者内での集団力学が見られた．ＦＧＤで一般的に言われるように，

友人などの知人はなるべく違うグループに入れた方が良いと感じた反面，日本でＦＧＤを行う際には集団力学が促進されるのでははないかとも感じた．

⑷　人数

欧米のＦＧＤに関する文献によると，ＦＧＤを行う際の最適人数は６人から12人とされているが，今回のＦＧＤでは，男性社会人，女子大学生グループ（共に４人）のように，人数が少ない方が良い結果を得ることが出来た．人数が４人程度であると，２時間という時間的制約の中においても，参加者同士がうち解けることができ，参加者間のやりとりが促され活発な集団力学が見られた．逆に､第一グループ（11人）の場合，モデレーターが，全員の意見を引き出そうとするあまりに､「モデレーター対参加者一人一人」といった集団面接的要素が高まり，参加者もお互いに打ち解けないため，集団力学は小さかった．また，座席の配置，部屋の大きさ等によっても，集団力学は多大に影響された．参加者同士を内側に配置し，モデレーターや記録係などを外側に配置することによって，参加者同士の親近感を増すことができた．

⑸　ガイドライン

本ＦＧＤのように，研究の予備調査として位置づけられるものでは，事前に決められた質問に対する回答よりも，そのトピックに関して参加者が重要と感じている幅広い分野に関するディスカッションが行われることが望ましい．今回のＦＧＤにおいても，第１回目のＦＧＤでは，ガイドラインに沿って質問をしたため，参加者が重要と思っていないことに対しても，無理に回答を迫ることとなった．この反省をもとに，第２回目からは，大まかなトピックの設定は用意したものの，フリートーク的要素を多く取り入れたため，研究者が予測しなかった事柄までディスカッションが及んで参考となった．しかし，この結果として，一つのグループで話されたトピックが必ずしも他のグループで話されるとは限らない（例えば，主婦グループでは妻の海外経歴に対する夫の反応が議論されたが，他のグループでは配偶者や家族の反応については言及されなかった）ため，分析時点で情報の「穴」が生じること，ディスカッションが白熱するとトピックが本来のトピックからずれていっても修正が効かないこと，など欠点も確認された．

5.　結論

今回，ＦＧＤを調査方法の一つとして導入することにより，二つの知見を得ることができた．一つは，ＦＧＤから研究の方向性を左右するような情報を得ることが可能であるということである．ＦＧＤは研究者の主観が入りやすいという欠点を持つが，適切な実施・分析手順を踏むことにより，大きな役割を果たす可能性を秘めている．二つ目に，日本でＦＧＤを行う際に配慮する必要がある課題に気づいたことである．海外のマニュアル通りにＦＧＤを行っても，日本においてはその手順の前提条件となっている集団力学や個人の発言に対する期待が異なっているため，理想通りには運ばないのが現状である．

この調査におけるＦＧＤは新たな分析視点の導入という役割を果たした．もしＦＧＤを行っていなければ，研究の中心は海外体験の内容とその影響であり，帰国後の適応過程と

適応ストラテジーに注目することはなかったと思われる．予備調査としての位置づけで行われるＦＧＤは，通常，接近することが難しい対象者が研究テーマである場合や先行研究がまだ少ない領域の研究を行う場合，有効な手段であろう．

ただし，ＦＧＤはアメリカで開発された手法であるため，日本でＦＧＤを行う場合には幾つかの点で配慮が必要である．例えば，ＦＧＤのマニュアルには通常６人から12人がＦＧＤの最適人数とされている．しかし，12人も集まると日本人の場合，参加者内の自発的なディスカッションは進まない．モデレーターと１対１の集団面接になってしまう．参加者構成も知り合いを含んだ方が集団力学が生じる可能性が高い．理想的なＦＧＤを日本で行おうとするならば，参加人数と構成には特に注意を払う必要があるだろう．

謝辞

本稿は「国際移動者の社会的統合に関する研究」プロジェクトの一環として行われている「帰国生の長期的適応ストラテジーに関する調査研究」(主査：東京学芸大学　加賀美雅弘）に基づいたものである．ＦＧＤの実施および本稿の執筆にあたっては東京学芸大学教育学部附属高等学校正木智幸先生に多大な協力をいただいた。この場を借りてお礼を申しあげたい．

参考文献

小島　宏（1998)「人口研究におけるフォーカス・グループの可能性」日本人口学会第50回大会第６部会配布資料

小林哲也　他（1988)「帰国子女の適応に関する追跡研究」京都大学（昭和62年度科学研究費補助金研究成果報告書）

佐藤郡衛（1997)『海外・帰国子女教育の再構築―異文化間教育学の視点から』玉川大学出版部

中西　晃　他(1988)「青少年時代の異文化体験が人格形成に及ぼす影響」東京学芸大学（昭和62年度科学研究費補助金研究成果報告書）

American Statistical Association（1998）*What Are Focus Groups?*, Alexandria, Virginia: Section on Survey Research Methods, American Statistical Association.

Bogue, Donald J.（1993）"Role of the Qualitative Method in Demographic Research", in *Readings in Population Research Methodology, vol.6, Advanced Basic Tools*, Chapter 24, edited by Donald J. Bogue, Eduarudo E. Arriaga, and Douglas L. Anderton, New York: United Nations Population Fund,

Callaghan, Gill（1998）"The Interaction of Gender, Class and Place in Women's Experience: A Discussion Based in Focus Group Research", *Sociological Research Online* 3(3), Retrieved June 30, 2000 (http://www.socresonline.org.uk/socresonline/2/1/6.html)

Calves, Anne E.（1999）*Condom Use and Risk Perceptions among Male and Female Adolescents in Cameroon: Qualitative Evidence from Edea*,（Working Paper No.22), Washington, D.C.: Population Services International Research Division

Catterall, M. and P. Maclaran(1997）"Focus Group Data and Qualitative Analysis Programs: Coding the Moving Picture as Well as the Snapshots", *Sociological Research Online* 2(1), Retrieved June 30, 2000 (http://www.socresonline.org.uk/socresonline/2/1/6.html)

Fuller, Theodore D., John N. Edwards, Sairudee Vorakitphokatorn and Santhat Sermsri（1993）"Using Focus Groups to Adapt Survey Instruments to New Populations: Experience from a Developing Country", in *Successful Focus Groups:*

Advancing the State of the Art, edited by David L. Morgan, Newbury Park, CA: SAGE Publications, pp.89-104

Knodel, John (1998) "Using Qualitative Data for Understanding Old-Age Security and Fertility", in *The Methods and Uses of Anthropological Demography*, edited by Alaka M. Basu and Peter Aaby, Oxford, England: Clarendon Press: pp.57-80

Knodel, John (1997) "A Case for Nonanthropological Qualitative Methods for Demographers", *Population and Development Review*, Vol.23 No.4, pp.847-853

Knodel, John (1993) "The Design and Analysis of Focus Group Studies: A Practical Approach", in *Successful Focus Groups: Advancing the State of the Art*, edited by David L. Morgan, Newbury Park, CA: SAGE Publications, pp. 35-50

Knodel, John, Werasit Sittitrai and Tim Brown (1990) *Focus Group Discussions for Social Science Research: A Practical Guide with an Emphasis on the Topic of Aging*, (Population Studies Center Research Report, No.90-3), Ann Arbor, Michigan: University of Michigan, Population Studies Center

Knodel, John, Anthony Pramualratana and Napaporn Havanon(1988) "Focus Group Research on Fertility Decline in Thailand: Methodology and Findings", in *Micro-Approaches to Demographic Research*, edited by John C. Caldwell, Allan G. Hill, and Valerie J. Hull, New York: Kegan Paul International, pp.41-55

Kojima, Hiroshi, Sagaza Haruo, Otake Toshiko, Hayashi Kenji, Tanada Hirofumi and Sakagami Hiroko(1999) "Living Arrangements and the Elderly's QOL in Japan: New Insights from Focus Group Discussions", *Hallym International Journal of Aging*, Vol.1 No.2, pp.112-116

Kruger, Richard A. (1994) *Focus Groups: A Practical Guide for Applied Research*, Thousand Oaks, CA: SAGE Publications

Kruger, Richard A. (1998) *Analyzing & Reporting Focus Group Results*, Thousand Oaks, CA: SAGE Publications.

Limanonda, Bhassorn, Mayuree Nokyoongthong, and Malee Sabaiying (1999) "Female Migrants and Non-Migrants and Their Roles in Maintaining Environment: A Summary Result of Focus Group Discussions: Thailand", *Sustainable Urbanization, Women's Status and Religion in Southeast Asia*, (Research Series, No.296), Tokyo, Japan: National Institute of Population and Social Security Research, pp.123-147

Marquez, Maria Paz, Nimfa B. Ogena, and Zenaida E. Quiray (1999) "Migration and Urban Life Adaptation in the Philippines: Findings from Focus Group Discussions", *Sustainable Urbanization, Women's Status and Religion in Southeast Asia*, (Research Series, No.296), Tokyo, Japan: National Institute of Population and Social Security Research, pp.83-94

Massey, Douglas (1993) "The Methodology of an Ethnosurvey", in *Readings in Population Research Methodology, vol.6, Advanced Basic Tools*, Chapter 24, edited by Donald J. Bogue, Eduarudo E. Arriaga, and Douglas L. Anderton, New York: United Nations Population Fund

Massey, Douglas S., and Rene Zenteno (1999) "A Validation of the Ethnosurvey: The Case of Mexico-U.S. Migration", *International Migration Review*, Vol.34 No.3, pp.766-793

Morgan, David L. (1997) *Focus Groups as Qualitative Research*, Newbury Park, CA: SAGE Publications

Morgan, David L., (ed.) (1993) *Successful Focus Groups: Advancing the State of the Art*, Newbury Park, CA: SAGE Publications

O'Brien, Kerth (1993) "Improving Survey Questionnaires through Focus Groups", in *Successful Focus Groups: Advancing the State of the Art*, Newbury Park, edited by David L. Morgan, CA: SAGE Publications, pp.105-117

Stewart, David W., and Prem N. Shamdasani (1990) *Focus Groups Theory and Practice*, Newbury Park, CA: SAGE Publications

Vaughn, Sharon, J.S. Schumm and Jane Sinagub(1996) *Focus Group Interviews in Education and Psychology*, Thousand Oaks, CA: SAGE Publications.

Weber, Robert Philp(1993) "Basic Content Analysis", in *Readings in Population Research Methodology, vol.6, Advanced Basic Tools*, Chapter 24, edited by Donald J. Bogue, Eduarudo E. Arriaga, and Douglas L. Anderton, New York: United Nations Population Fund

Wolff, Brent, John Knodel and Werasit Sittitrai (1993) "Focus Groups and Surveys as Complementary Research Methods", in *Successful Focus Groups: Advancing the State of the Art*, edited by David L. Morgan, Newbury Park, CA: SAGE Publications, pp.118-136

Zimmerman, Margot, Joan Haffey, Elisabeth Crane, Danusia Szumowski, Frank Alvarez, Patama Bhiromrut, Vivian Brache,

Firman Lubis, Maher Salah, Mamdouh Shaaban,Badria Shawky, and Ieda Poernomo Sigit Sidi (1990) "Assessing the Acceptability of NORPLANT Implants in Four Countries: Findings from Focus Group Research", *Studies in Family Planning*, Vol.21 No.2, pp.92-103